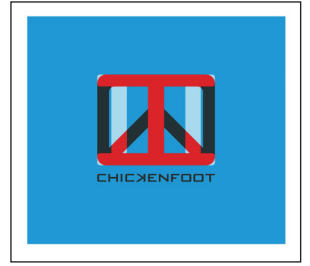


CHICKENFOOT II 解説



アルバム・アートワークが3Dになると最初に聞いた時は制作期間が極端に少ないのに大丈夫かと大いに心配したが、ご覧のように3Dといっても昔懐かしい、赤と青のセロハンを貼った眼鏡で見るタイプのものだった。

長きにわたりロックを聴き続けてきた方なら、「おお！『輝くグランド・ファンク』じゃないか！」と思われたのではないだろうか。デビュー作の感熱インク仕様から始まり、おじさんたちは何かアートワークにも何か仕掛けを施さないと気が済まないようだ。『輝くグランド・ファンク』が発売された時のフォーマットはアナログLPで30cm四方のアートワークが飛び出す様はかなり迫力があつたが、CDサイズになるとサイズが小さいせいもあって、ちょっとおとなしめな感じは否めないが・・・。

デビュー作『チキンフット』が発売された頃は、ヴァン・ヘイレン兄弟+デヴィ・リー・ロスのヴァン・ヘイレンのツアーと前後していたこともあり、元祖と本家の争いのような捉えられ方をしていたが、実際問題、チキンフット結成の裏には「お前たちがヴァン・ヘイレンを名乗るなら、こっちもやってやるうじゃねえか」という、「俺たちだって黙っちゃられない」的な行動原理があつたことは間違いない。インタビューとかになると「そんなことはないぜ！ガハハハ」とサミー・ヘイガーは豪快に笑い飛ばしていたが、ファンはみんなわかっているのだ。あんたが一番負けず嫌いなことを。サミーはバンド結成の背景を、気の合う仲間が集まりました、という部分を強調していたが、実際には豪快な反面、実は繊細にして、自己の音楽性がまったく揺らがない彼の綿密な計算の上に成り立ったバンドだったのである。

まず、ヴァン・ヘイレン時代の仲間であるマイケル・アンソニーとレッド・ホット・チリ・ペッパーズに在籍しているチャド・スミスと組ませたことにセンスが光る。ヴァン・ヘイレン時代は影の薄い存在だったマイケル・アンソニーだが、特にスピード感やトリッキーなプレイに依存せず、ミッド・テンポ主体のグルーヴ感に移行し成功を収めたサミー・ヘイガー時代のヴァン・ヘイレンにあつては、その独自のグルーヴの肝となった。決して派手なプレイではないものの、基本に忠実なベース・ラインの根底には極太のファンクネスが常に宿っていたのである。また、ヴァン・ヘイレンの代表的なナンバーを聴くと、不思議とコーラス部分で気分がグンと高揚する。エディのギターや、デヴィ・リー・ロス、サミー・ヘイガーといった大御所ヴォーカリストの大技の陰に隠れてしまっている部分だが、ヴァン・ヘイレンのコーラスはバンドにとって出汁のようなものでそれがバンドのキャラクターを印象づけていた。そのコーラスの要がマイケル・アンソニーだったのだ。その彼を、白人ファンクの最高峰と言って良いレッチリのリズムの要、前ノリ、後ノリ、ローリング、ピッチング何でもどんと来いのドラムと組ませた時点で、このバンドの成功は決まっていたと言っても良いだろう。マイケル&チャドのリズム・セクションの良さというのは、排気量の多い車のエンジンのようなもので、常に余力を残しているところで、独自のグルーヴを叩き出している。

本作『チキンフット III』でも、この類い希無きリズム・セクションの醍醐味は十二分に発揮されている。例えば、トラック3の「ディファレント・デヴィル」やアルバムに先駆けて先行シングルとなった「ビッグ・フット」。ハイ・パワー・エンジンであるこのリズム・セクションにとって、ほとんどストレートな8ビートであるこのナンバーは、日常、街中を流しているのと変わらないごく当たり前の仕事なのだが、パワーに余裕があるが故の重心の低い安定感があるボトム・ラインを叩き出す。チキンフットのアルバムを買うファンはそこは当たり前という前提なのだろうが、このベンツ並みの安定感にはグッとこみ上げてくるものがある。（話が飛びますが、そう考えると、音楽というのはこうしたベンツ並みのロックも、軽自動車みたいなものもCDにしる、デジタル・ダウンロードにしる、同じ値段で売っているわけで、ある種リーズナブルな気もするけど）。

さて、このハイ・パワー・エンジンのようなリズム・セクションはサミー・ヘイガーにとっては必要不可欠なもので、チキンフットが標榜するヘヴィ・デューティなラウド・ロックはこの2人が組んでこそ初めて現実味を帯びてくるのである。この余裕のエンジン部分に、汎用性が高く、テクニ的にも世界最高峰の技術を持つギタリスト、ジョー・サトリアーニ。ロック界きつてのごっついヴォーカルが乗っかるのだから、古今東西、ほぼ無敵に近い。

そのチキンフットのセカンド・アルバムにあたる『チキンフット III』（ちなみにタイトルはサミー曰くあまりに出来が良いので、IIをすっ飛ばしてIIIになった、といういまひとつよくわからない理由があるそうだ）はデビュー作と比べはるかにこのバンドらしさを打ち出した作品となった。デビュー作はセッションからスタートし、バンド・メンバーがそれぞれの活動で培ったものをそのまま持ち込んでくることからスタート。メンバー中50%が元ヴァン・ヘイレンであったため、その色合いが濃く出た作品となった。いうなれば、それまでやってきたことの癖がそのまま出てしまっていたのだが、アルバム制作後のヨーロッパ、USツアーを経て、バンドの音楽性はそれまでの経験を越え、チキンフット独自のものへと変化していった。発売前のインタビューでメンバーは口々に「より、パワフルなサウンド」といったようなニュアンスを繰り返していたが、実際のところは、デビュー作と比べるとそのサウンドは、よりタイトでコンパクトになったように思える。アルバム1枚限りの、スペシャル・セッションとしてならば、デビュー作が持つ破天荒なパワー・トリップでも良いのだろうが、こうした力技のような制作スタイルは、経験と才能豊かなメンバーが揃っていても、何枚も続けられるものではない。よりタイトにアンサンブル重視のサウンドに本作でシフトした背景には、このバンドを今後も長く続いていくことを前提にした独自性の構築が始まっていると思うので良いだろう。

デビュー作では、セッションから生まれたライブ感覚を重視することを主眼に置いたため、楽曲によっては、昔のバンドでやっていたリフを崩して発展させ、オyajの鼻歌感覚で流した歌メロに強引に歌詞を乗せたかのような曲も見られたが、今回はアルバム全体の流れに一本芯が通っている。オープニングの「ラスト・テンプレーション」からして脱ヴァン・ヘイレンの意志が感じられる楽曲だし、このグルーヴ感はサミー・ヘイガーの過去のソロ作ともことなる。まだ完成型までは至っていないが、バンドとして機能が日々発達していることを示す好材料になっていると思う。

バンドは9月末のアルバム発売に合わせ、サンフランシスコの小さな会場でWEBキャストを27日に行い、その後、ウォーム・アップ・ギグを何本かこなした後、ツアーを開始する予定になっている。アルバム発売に合わせたプロモ・イベントには、チャド・スミスも参加する予定だが、彼のパーマメント・バンド、レッチリも活動中、しかもチャド本人も怪我をして、この10月に来日公演を行う予定になっていた自身のユニット、ボンバスティック・ミートパッツも含め、本ツアーでは代理のドラマー（現時点ではどちらもケニー・アラノフ）がプレイする模様だ。実際、チャドは怪我を負っているわけだが、本作発売に関し、アルバム周りの印刷物、資料、広告等でチャド・スミスの名前を出すことはできてもレッド・ホット・チリ・ペッパーズと併記することは禁止という通達が出されており、今後の彼の動向が多少気かりではあるが、ライブでの展開が容易に読めたデビュー作とは違い、ライブ・アレンジにした際、発展性がある興味深い楽曲が多い本作。今回は是非来日公演が実現することを祈りたい。